

豊色

〜〜〜

月

艶色

くつやぶきく

月

目次

Cunning Fellows

あの夏、

一番静かな夜。

予告編

1 6

4

Cunning Fellows 古守 久万

「もうっ…遠野君、ずるいよ。」

「つむぎながらの先輩の一言に、俺はただキョトン、とするしかなかった。

「…はっ先輩、突然何言ってるの??ずるいって、俺が?」

自分を指差し、そう言ってみる。が、考えてみれば確かに思い当たるフシは沢山ある。

例えば、もう兆候はないのに貧血だと言って、学校をサボり先輩の部屋にいる事とか。

(これに関しては今この場にいる先輩も同罪だけど)

その上食事まで「馳走になって」ついついのんびりと語らっている事とか。

(「多分に漏れず夕食はカレーだった」)

まさかお金が無いからといって、大体のデートは先輩に奢らせてしまっている事とか。

(これは小遣いをくれない秋葉が悪い、がそこは悲しき居候、文句は言えないからなあ…)

先輩に内緒で、有彦と足繁くとあるお店に通っている事とか。

(そのうち教えるつもりだけど、「こは、仕込み」が必要なんだ、許して先輩)

…まだまだ実はあつたりするけど、考えるだけ自分が情けなくなるからこの辺でやめにしよう、うん。

…

「で、先輩、俺の何処がずるいんですか?ちゃんと説明して下さいよ」

俺はとにかく、先輩の意図を理解したために訪ねた。

けど、先輩はなんだか徐々に紅潮してきて…あれ?いつの間にか真っ赤だ。「何処って…そんな事が弱い女の子に言わせないで下さい、恥ずかしいです…」両頬に手を当て、真っ赤な顔を隠すようにしながら先輩は消え入りそうな声で答えた。

でも、先輩に限って、か弱い「は無いと思う」けど口に出したら多分俺はパーベキューの肉・野菜の如くにされちゃうだろうから出さない。

以前、俺の耳たぶを1ミリ裂き、壁に突き刺さった黒鍵の感覚を覚えているから。

「次は遠野君でも容赦しませんよ(はあと)」

の一言で、俺は彼女を一生幸せにしようと思った…思わされたくらいだから。

結局、秋葉の独裁から逃れたいと思ってたのに、先輩にこうなっちゃうんだから、俺って実は尻に敷かれるタイプなのかなあ、と、しみじみ思っ…マズイ、涙が出そつた。

「あの、先輩?」

俺は一人で蒸し上がっちゃってる先輩を覗き込んだ。

「見ないで下さい。ずるい遠野君なんてキライです」

何なんだろう、突然キライなんて言われても。

話も一段落してなんか、「いい雰囲気」になってきたと思っただのに、突然これだもんなあ。

そうか、この持ち込み方が悪かったのか?

いや、日頃からこういうパターンで先輩と「色々」やって、そのまま2人で夜を明かして朝帰り、秋葉にお目玉と…そんな事は今はどうでもいいたろうが。

「わかった、俺が何かしたんだったら謝りますから、教えて下さい」

俺は訳もわからず頭を下げ、先輩の許しを請うた。

すると先輩は赤いながらもちよっと拗ねた顔を上げた。

「じゃあ、遠野君に聞きます。私の事、本当に愛してくれてます?」

「なっ……!」

質問は、俺の思考を麻痺させるのに十分だった。

突然の展開

想像も付かなかったからただ驚くばかり。

ようやく我に返ると、自分でも興奮しているのが解るくらいに叫んだ。

「何言ってるんですか!俺は先輩を誰よりも愛しているんですよ。先輩を幸せにするって、約束したじゃないですか!」

そうだ、あれだけ笑わせた。悲しい思いもさせた。

共に闘った。

愛を誓い合った。

約束した。

確かに俺はまだ高校生だから、いろんな意味での約束はちよつと早い気もするけど、それはいつか必ず実現させるモノなんだと、重々了解している。

先輩は、俺の語気に少し気圧されたのか、慌てながら

「違います遠野君、そう言つて意味じゃないです」

手を顔の前ではたはた振りながら否定した。

「じゃあ、どついつの意味なんです、先輩?」

「そうですよね……」

急にいつものんびりした先輩に戻る。

口到手を当てちよつと宙を彷徨つように言葉を探している先輩を見て、俺も少し慌てすぎたかな、と冷静になって次の言葉を待った。

「何とというか、愛情表現なんです、よ、そつ、表現です」

先輩も掴みあぐねていた言葉を引き出すようにそう言つて、少し俯いた。そ

の類はまた赤くなり始めている。

このコロコロ表情が変わるのが、先輩の良い所だったりするんだよね。

「表現……ですか?」

俺もそつ言われて考えてみる。

先輩に対する愛情表現と言えば、そりゃあ若い男女が一緒にいたらする愛情表現は一通りしているはずだけどなあ。でも、なんだかんだ言つても俺だって女性とお付き合ひするのは初めてなんだから、色々不満があるのかも知れない。そつ言つるところを語り合つて、愛を深めていくのが恋愛ってものなんだろ、とか思つてみる。

「俺、何か間違つた事していたりしましたか?」

ちよつと不安になりながら俺が訪ねると……あらあら先輩、なんでそんな微妙な顔するんですか?

「いや、遠野君は間違つていると言えば間違つてはいるんですが……やっぱり間違つてないのかもしませんが……やっぱり間違つて……」

「こによこによと、あるないを繰り返す先輩、全く持つて謎だ。間違つていたり間違つていなかつたりつて、そりゃ意味が通じませんよ。」

目の前でもじもじとしている先輩。何か微妙にかわいかつたから、ちよつとキザに迫つてみたり。

先輩の両肩に手を置く。

自分の世界だった先輩はビクッと肩が震えて、顔を上げる。

「遠野……くん?」

出来る限りのニヒルな笑顔を見せながら、俺は先輩の目を覗き込むように囁いた。

「先輩、教えてください」

今時、こんな背景に光や薔薇が出そつな言い方もどうかと思つが、意外に純真で乙女チックな先輩には効果観面だつたりする。

顔は真っ赤、今にも沸騰しそつでところけ顔なんか俺がコマシてるみたいでホストになれるかな、とか思つちやつたり(無理です)

「はっ…」
素直に答えた先輩が見つめ返してくる。

めっちゃめっちゃわいくて、黙って抱きしめて押し倒したくなるけど、理由を聞き出すまでは我慢…出来るかなぁ。とにかく、話して貰えそつだ。

「遠野君、あのですね、私とするとき、色々してくれるじゃないですか…」
確かに色々してる、かもしれない。

けどそれは先輩がちょっと、「いちめて光線」出したり、反応が良かったりするからだし、何より先輩だって喜んでるし。それに俺の非があるわけでもない。

それが不満なら先輩のワガママだよ、とでも言いたかった。でもそこは落ち着いて表情を崩さずにいた。

「でも…」
「でも…」

そう言っ言葉を待つ。先輩は言い迷うようにして俺の目を見てる。が、遂に目線を逸らせながら続けた。

「…遠野君、中に出してくれないじゃないですか…」

「はあ…そんな事ですか…っつて?」

中って先輩、何を?…中、ナカ^{なか}、膣…!?ワカラナイ、ワカラナイ。解っているけどワカラナイ。

「せせせせ先輩!?何を!」

俯き真つ赤な先輩に対して、俺は大混乱だ。そりゃあもつ、素手で脳味噌を振り回されたが如く。

「だって遠野君、今まで一度も中で出してくれた事無いんですよ。その…初めての時から」

混乱しながらも考えてみる。
先輩と初めて結ばれた時から…確かに最初は外出しで、その後先輩にねだら

れて2回戦は…お尻か。

これが興奮するから、最近はおっぱい後ろ…とか、そう言う事が思い出されるが、してないのは確かに事実かも知れない。

「2週間も会えなくなるっていうのに、あんまりじゃなかったですか、もつと愛して欲しかったです…」

「先輩、でもそれって…」
大事な事を言う前に、先輩がそれを遮った。

「解ってます、でもそれって重要なんです。遠野君の気持ちは嬉しいです。でも、何かが足りないんです。私は中に出してくれるのも愛情表現の一つだと思ってるんです…」

ドクン。

ヤバイ、俺の中の血が少しずつ沸き出した。先輩は物凄い告白してくれちゃっているぞ。

「遠野君、他の女の子達にはちゃんとしたの!」
他の子?しかも「達」…だって俺は朱鷺恵さんと…

あれ、なんだこの頭痛は?アルクエイドや秋葉や翡翠に琥珀さんの姿が…更には、誰だこの子猫のような黒髪の子…しかもみんな裸だし…

知識の井戸…じゃない!並列世界上の俺は、一体何をやってるんだ?

ワカラナイワカラナイワラワラ…

「だから」

ぐるぐる回るビジョンを止めたのは先輩の一言だった。
現実に戻り、でも未だ混乱していた俺へ、先輩の最終攻撃が炸裂した。

「私にも、中で出してください…私ばかり仲間はずれじゃ、嫌です…」
「こちらをまっすぐ見つめ、咳く。すぐに煙を噴いて下を向いてしまった先輩

紅潮している鎖骨の部分がいやらしい。

服に押しつけた鼻で息をすると、先輩のにおいがする。いつも側にいるはずなのに、そのにおいは男心をくすぐるような麻痺させるような魔力を感じた。香りを楽しんでから、その胸に右手を伸ばす。

「あ……」

触れただけで、先輩が反応する。先輩はとつても感度が良くて、愛撫しているこちらも嬉しくなる。そのまま、ゆっくりと円を描くように揉み出すと

「ん……あ……」

先輩の鼻にかかった声があがる。同時に首筋にも再度の徘徊。2カ所の攻めに先輩も理性を失ってきている。

右手の動きはいつそうせわしくなり、服の上からブラの際をなぞり、それから中心めがけて進み、遂にはカップに包まれたその膨らみの頂点を探り当てて。

そこは既に存在感を示し、俺の指に突起物の反応を返す。軽くさすってあげると

「きゃ……」

それだけで先輩は悲鳴を上げる。

うん、服の上からでもこれなら、直に触ったらどつなっちゃうんだろうとか思ってみたりする。

「先輩、脱がすよ……」

俺はそう言っつて、先輩のブラウスのボタンを首筋から移した口で銜えた。軽く引つ張つてその意味をアピールする。

最初はまだ快感の波に吞まれてた先輩は返事しなかつたが

「だめ……」

とだけ何とか振り絞つたよつな声で答えた

「折角だから、ちゃんとしたところまでしてください……」

何が折角だから良くわからないけど、リクエエストに答えよつ。

ちゃんとしたところと言えは……間違いなくヘッドだろう。確かに床の上じゃ

肝心なとき下が気になって可哀想だ。

(まあ、自分が下になれば良いんだけど、今日はそんな展開じゃないし)

「先輩、ベッド行こ」

「はい……でも」

「ん？」

「なんか、腰が抜けちゃって……」

正直、驚いた。既に感覚が麻痺してフラフラなんだ。じゃあ、この手の支えを失つたら先輩はくたつと倒れちゃうのかな？

なんだかもつ、耐えられないほどかわいかった。

「よし、じゃあ」

と言っつが早いか、先輩の足をすくうようにして持ち上げた。俗に言っつ、お姫様だつこ」だ。

「きゃ……遠野君、恥ずかしいです」

先輩は避難の声を上げるけど、その声に強い拒否を示す強さはどこにもない。

俺はそのまま先輩をベッドまで運ぶと、ちよつと軽く先輩を放つた。スプリングで跳ねた体が、ゆっくりと布団に沈む。

「あ……」

少々乱暴だつたかな、先輩がちよつと小動物の目で見てる。

その目が、紅くなった肌が……宙を舞つていたから制服のスカートがちよつと乱れていてそこから覗くスラリとした脚が……僅かに見えるショーツが……艶めかしい。

チラリズム万歳

ちよつと理性が破壊されそつ。

いや、十分破壊された。

「先輩……」

俺は先輩を見下ろしながら、憑かれたように呟いた。

「今までの分もいっばい出してあげますから、覚悟して下さいね」

先輩が真つ赤になる。自分でも何言ってるのかワカラナカタが、もう我慢も限界だった。
シャツを脱いで上半身をさらけ出すと、ゆっくりとヘッドにあがった。

「んっ……」

改めて唇を重ねる。今度は同時に先輩のブラウスに手をかける。

上から一つずつ、興奮しているにもかかわらず驚くほど冷静に、丁寧にボタンを外していく。

白いブラウスの下は白い下着。さつき垣間見えたショーツと柄は一緒だろっ。シンプルにも、先輩の体を強調して十分すぎる程だった。

ブラウスの前をはだけ、まずはブラからこぼれている肌を舐める。つつくように舌をあてがうと、十分な弾力。

多分秋葉なら味わえないだろうなあ。おっと、こんな時に他の女の子の事を考えるのは失礼か。

反省しつつ、ゆっくりとブラの上から突起を軽く舐める。

「あっ……」
先輩の艶の混じった声に俺も興奮する。実はそんな準備も必要なかった。すぐにブラを取り外そうとする。

手を後ろに回す前に、ふと目を胸の谷間に合わせると……
「あれ、フロントホック……っ」

珍しかったから、ちよっと間の抜けた声になった。

「……はい。こつなる事を期待して、遠野君が脱がしやすいうちを選びました」
先輩はちよっといつもの説明口調だけど、そんなふやけた顔で言われても説得力がないよ。

逆に、破壊力は十分だけど……

「先輩……」

「きゃっっ……」

なんだか嬉しくなった。勢いに任せてホックに手をかけ、外す。

パチ、という音の後、包みは左右に分かれ、少し窮屈だった先輩の胸を露わにする。上向きなのにしっかりと形をたたえ、美しい曲線だった。これが自分のものになっているんだから、正直たまらない。

そのままじーっと眺めていると

「遠野君……」

先輩がこちらを見ている。

恥ずかしくって手を顔の前で握るようにはしていたが、それが胸をかえって強調するようになっていたので、まるで胸を差し出されているようだった。

「早く……来て下さい」

先輩も感じたいのか、目が潤んでる。

「言われなくても、先輩をめちゃめちゃにしますよ」

言って、両手で先輩の双房をこねる。

「あっ、あん……んんっ！遠野君……」

リズムカルに、クレシェンドをつけ、アダージョからアレストに……左右別の動きでそれを揉みしだき、下から支え上げるようにして、そして先端で存在を示す乳首に吸い付く。

「ああんっ……」

いっそう大きな声で先輩が喘ぐ。その声の刺激を受け、よりいっそう強く淫らに吸う。

チユツチユツと音を上げ、そして軽く歯で噛むと

「んんんっ……」

先輩は耐えるように声を絞って、体を強ばらせ、手は強く握っていた。

これだけ感じているんだったら、もう充分かも知れない。勝手にそう思っただけで、先輩のスカートに手をかけた。

そのままゆっくり下ろそうとするが、先輩はまだヘッドに沈み込んだままで、上手いかない。

仕方ないからスカートの前をはだけるように、手を中に差し込んでみた。

「あっ……」

声は実は同時にあがっていた。片方は先輩がそのことに気付いて驚いた声。もうひとつは……

「先輩……」

「いやっ、言わないで下さい」

「もう、こんなに濡れてるんだ……下着の上からなのに」

そう言つと、俺はショーツの股間の部分にあてがっていた手を抜く。

そこには布地を通してでもなお染み出ている、先輩の愛液が光っていた。軽く押さえただけで、スポンジから水が出る如く、いつものはあるのではないかという量だった。

「先輩、いつもより感じてるね……そんなに期待してるんだ」

「はい……」

消え入りそうな声で先輩が頷く。その姿が怒られた子供みたいでかわいいから、ちょっといじめたくなる。

「もうエッチだなあ、先輩は」

そう言つと人差し指の爪で、少し上……既にそこが布地の上から解るほどに隆起しているクリトリスを軽く引っ掻く。

「あ！あああっ！」

ピクピクッと大きく震える先輩。布地に新たに大きく染みの広がる感触。

あれ……？

「もしかして、イッチャった？」

その染みをなぞってスカートの中から抜き出した指を、ぼーっとしている先輩の前にかざして、わざと見せつける。

「……」

惚けながらも、恥ずかしさで目をそらす先輩。完全に横を向いちゃってる。

チユツ

その愛液をわざと音を立てて口に運ぶ。気のせいか甘い味がするようだった。

先輩がピククリと恥ずかしいの中間の顔でこちらを見てきたから

「でも、エッチな先輩、俺大好きだよ」

にっこりと笑いかけて、そのまま先輩のショーツを脚から抜き取り、人差し指を割れ目にあてがう。

「ああ……っ」

先輩の声と共に、指は何の躊躇いもなく飲み込まれていく。

先輩の中は指一本だけなのに窮屈で、それさえも締め付けようとする収縮が感じられる。その貪欲な動きに誘われ、中指を合わせて射し込む。

そのまま、リズムカルに抜き差しすると

「あっ、あっ……ん」

動きに合わせて、先輩の体と声が上下する。クチュクチュと、先輩の愛液と俺の指とで鳴らす音が、俺の僅かに残った余裕も奪い取るうとしていく。

2本の指に、更に薬指も合わせる。さらに余った親指の腹で、卑猥に息づく秘裂の頂点にある小さなクリトリスを優しくこねる。

「……っ……あっ……」

俺の愛撫に先輩の声が途絶え途絶えのものになる。既に息も苦しいほどに喘いでいる。このままもう一度イカせても良かったけど、正直こっちが限界だった。

「先輩……行くよ」

確かめるまでもない。確かめる余裕もほとんど無かった。

俺はせわしなくジッパーを下ろし、もう痛いくらいに立ち上がった。それを引きずり出すようにした。俺の方も今までにない興奮で、先輩と初めて結ば

れたときよりも勃起しているようだった。

「来て……来て……」

その始終を、顔だけ何とかあがるようにしていた先輩が、うなされるように
呟く。その手が、俺を導くように秘裂を拡げる。ニチャリと、その間から流れ
出る粘液がシートを汚す。その目が、これから起こるであろう光景に向けて淫
靡に光っている。

雌の目。

その目に、俺の雄の血も、七夜の血も、有るはずのない遠野の血も、無くなっ
たはずのロアの血までもが沸騰しきってしまったようだ。

俺は覆い被さるよつに、先輩に文字通り飛びかかった。最後に

「今日は、先輩にぶつ壊されちゃいました。だから手加減しません、責任取っ
て下さいね」

言つが早いから、入れる場所を探していた自分の欲望の塊を、先輩の膣に突き
入れた。

「ああっ……」

入れただけで物凄い収縮が起こる。

只の収縮じゃない、先輩は入れただけでイッたんだ。

更に内部から溢れてくるような新たな奔流。そして搾り取るよつな、内部へ
向かう断続的な収縮。本能の見せる動き。

「くっ……先輩の膣、いつもより凄い……」

俺も収縮に負けて射精してしまいたかったが、早漏だなんて思われたくない
し、まだまだ先輩のこの素晴らしき感度の膣を楽しみたいから、奥歯を合わせ
て我慢した。

「あん……ああっ……ん!?」

先輩はまだ波に飲まれてる。収縮はきついがだんだん収まってきたようだ。
ここを耐えれば、少しの余裕が生まれる。

「先輩……」

俺は繋がったまま、汗で顔に張り付いた髪を払うように先輩の頬に手を当て
る。焦点の合っていない目で俺を見つめてる先輩、未だ心ここにあらず、と言っ
た感じが。

「ああ……ああ……遠野君……」

体全体を近付けていくと、彷徨っていた先輩の手が俺の背中にしがみつくと、唇
を重ねていくと、驚くべき速さで舌が俺に絡み付いてきた。下だけでなく、上
での繋がりを求めるよつに。

まるで快感の渦から囁をも掴むが如く、意識を絞り出すようにその舌が蠢く。

「んん……うっ……ん」

合わせた口から先輩のくぐもった声が聞こえる。まるで無心、そんな感じさ
えもした。

俺もその行為に答えつつ、余裕の出来た下半身の動きを再開した。少しずつ
抜き出すように腰を引き、そしてまた同じように挿入する。

「ああっ……」

途端に唇を離して先輩が喘ぎ出す。

ひと突きひと突き、確実に先輩の膣を埋めるように送り込む。そのたびに先
輩は叫び、背中に置いた手に力が入る。

「もつと……もつと……」

そんな余裕はないだろうに、それでも先輩が俺を求めてくる。

主導権を握っている余裕から、それに答えるように腰の動きを早める。

同じ動きでも速度が速まれば快感も早いリズムで訪れる。それはこちらにも
同じだが、今はとにかく我慢した。奥歯が砕けそうな程噛む。その所為もあつ
てか

「あああ……ん!?」

先輩の声が一際大きいものになる。もはや悲鳴だ。

「凄いです……遠野……く……ん!?」

息ができてないのか、最後は掠れ声になった先輩の声。

気が付けば、先輩が横で微笑んでいる。

「俺、寝ちゃったのかな？」

「はい。流石に遠野君も私も疲れましたからね」

そう言いながらも、もしもじと自分の指を胸の前でぐるぐる回し、赤くなる先輩。

結局あの後、目を覚まして真つ赤になっている先輩が可愛いからそのまま正常位、バック、騎乗位、駅弁スタイルと4回。

「汗を流そう」と二人で入ったお風呂場で、シャワーで洗いっこしている間に、泡にまみれた胸の感触が気持ち良くて1回。

お湯の張った湯船の中でも、ちよつと狭いからって密着していたら、つい俺のが「きかん坊」になっちゃったから1回。

それはそれで、改めてベッドに戻ってからも…何回したのか覚えてない。

交わって、出して、息が整ったらまた再戦と、それこそ数えるのも無理なほどした。

もちろん、全部中出しだ。これは先輩のご要望だから、とにかく外に出すなんて野暮な事はしなかった。

もちろん、後ろも無し。たまに指を差し込むと、途端に前の締め付けが良くなったりするから、驚いて予想外に出しちゃったりもしたっけ。

「うーん。ああ、こりゃ今日もサボりかな？」

窓の外、カーテンからの明かりはだいぶ射し込み、窓際の時計はいい感じでお昼を迎えようとしている。

「大丈夫です。今日は第二土曜日で休日ですから」

先輩の的確なフオローが入る。

「そっか…なら、まだまだかな」

目覚めの微睡みをもう少し楽しんでいたかったが、それよりもまだ足りなかった。

「まだ、ですか…？」

先輩もちよつと期待したよな、呆れたよんな表情をする。

「なんて言うか…やっぱり底なしです」

赤くなって、先輩が笑う。

「そ。先輩が悪いんだからね」

そう言つと、俺は先輩に乗りかかろうとして…ちよつと思ひ出した

「ねえ先輩、どうしてあんな事…言つたの？」

「えっ？」

「いや、何となく知りたいから」

俺は浮かんできた質問を投げてみた。

今までそんな事無かったのに、どうして急に愛されてないかもなんて不安になったのか…？

「…実は、私もちよつと焦ってたのかも知れませんが」

「え？」

意外だった。焦ってたって…？

「先輩？」

「遠野君が私だけを見ていてくれるのは解ります。でも、遠野君は何となく私が捕まえておけるような人じゃない、と思つてしまつんです。言つてしまえば、みんなのもの、って感じてしょうか？」

「みんなの？」

先輩は俯くように寂しげな、悲しげな、何かを噛み潰すよんな複雑な顔をしていた。

「そうです。ロアがいなくなつて、私は運命から解放されて幸せになりました。

平和になると、何でもない日常にも、不安が射し込んでくる余地が生まれてしまつのです。ひよつとしたら妹さんや、使用人のお二人とか…あのアーパー吸

血鬼なんか、遠野君の気持ちに移つて、取られてしまつんじゃないか、なんて考えてしまつたんです…」

「そんな…」

そこまで俺は考えてなかった。

真正、生きてきた世界が先輩とは違う。

確かに少し特殊だったけど、元の平和な時間に戻って、いつも通りの生活
先輩が側にいる事だけが違っけど、が続くと思っただけど、先輩にとって見れば
日常が非日常だったんだ。不安にもなっただけで当然だ。

「でも、考え過ぎでしたわ。」

先輩は顔を向けると、いつものこりとした笑顔に戻った。

「こつして、ちゃんと遠野君は私の横にいてくれるんですか？」

決して作り物でない、先輩の笑顔。

そんな笑顔を抱え込むようにして抱きしめる。

「先輩、俺はここにいます。誰のものにもなりません。先輩のものです。」

ちよつと恥ずかしいけど、先輩を安心させるための宣言…いや、それは当たり前
前だけど、先輩を愛した時から、俺の永遠の責務であり、生きる目的でもあつた。

抱きしめる力を強くする。裸の先輩を全身で感じる。

だが邪な心はなく、何故か神聖な気持ちでいられた。

「そつてですね…」

先輩も抱き返してくる。今は理性が勝ってるけど、そのうち負けて、あつ立
て「ちやいそつだから、そのまま新たなラウンド開始にしようと思つた。

「…ちゃんと既成事実も作れましたし」

「そつだね…って？」

既成事実…キセイジジツ？ナンデスカソレハ？普通そつ言うのは違つんじや…？

!?

「せ、せせせせせせ、せせせせせせせせせせ、先輩！？」

ガバツ！と抱いている手を離し飛び起きた俺に、先輩は体を起こしながら答
える。

「はい、御察しの通りです。」

何故か先輩の笑顔に、恥ずかしさとは別の朱が差し込んでいた。

「昨日、口に出してくださって言ったのは、モシカシテモシカスルト…？」

先輩はにっこりと頷くと

「実は昨日から今日にかけて、排卵日だったんです。これだけ沢山に出して貰
えれば、生命力旺盛な遠野君の分身ですから、きつと、できちゃって、ますよ。
こつすれば他人に浮気なんてできませんしね。遠野君は私のものです。」

…視界がぐらりと歪んだ。先輩とは対照的に顔に青みが差しているのが自分
でも解る。

その前では、腹部の辺りに手を当てて、母親の目をした先輩。

「今から楽しみです。私と遠野君の子供ですよ。きつと可愛い子に違いないです。」

「ちよちよちよちよ、ちよつと先輩…！」

「何ですか、遠野君、？」

そんな姿を見せられ、混乱まっただ中の俺に対し、先輩は余裕だ。

「俺、高校生ですよ。そんなパパになるなんて知れたら、学校行けません。それ
に先輩だつて…！」

「その辺は大丈夫ですよ。妊娠は5ヶ月くらいにならないと見ただ目には解りませ
ん。そのころには私は卒業しています。流石にその後も交流の有りそうな乾君
あたりにはマズイですが、そこは私の暗示で、預かった子供」ともしておけ
ば問題有りません。」

「そんな…」

暗示はありますが、我が家には暗示なんて、いくらかけてもかかり
そつにない女傑が3人もいらっしやるのですよ…

ああ…秋葉の櫛髪が、琥珀さんのクスリが、翡翠の料理が思い浮かぶ…俺才

先マックラフ？

「じつになつたら、受精卵を…」

眼鏡を外そうとした俺の手に触れる冷たい金属の感触。いつの間にか先輩はスラリと長くて美しい長剣を、その手に構えていた。

「変な事は考えないでくださいね。十一ヶ月ほどベッドで生活したくありませんよね？」

「…はい」

完全に、俺は騙されていた。そして、結局は女性の手のひらで踊らされてるんじゃないかー！

結局、相手は誰であれ尻に敷かれる運命だったのね…ああ、涙が溢れてきたよ。

先生、助けてください。俺は先生にも尻に敷かれるかも知れないけど、今の境遇よりずっとマシです…

その時、俺は何故か針灸用の長針を持ち歩こうと誓った。隙あらばその点を突く為に。

…結局、先輩の日頃の激務がたたつて、奇跡的に生理が遅れてくれたのが先輩にとっては誤算であり、俺にとっては神の助けであった。

3日遅れで「来ちゃいました…」とがっくりする先輩と、それを聞いて大喜び踊りまくっている俺を見たとき、周りの人はどう思ったのかなんで、この際細かい事は気にしちやいられない。

（ちなみにその後、俺が学校をちょっと休む事になった理由も、ここでは教えない…グスッ）

お陰で、28日周期の計算が得意な、ちょっと珍しい男の誕生となった。

教訓：中出し最高…じゃなくて、「注意一秒、怪我一生」

後書き

月姫は去年の冬コミ時から知ってはいたのですが、どうせたかが同人だし」と高をくくり、ブレイクもませんでした。今年の九月、実家で免許を取得している際、暇だからと手元にあった月姫をブレイク。

…即死でした。一般もゲームはほとんどやらないのに、一気のクリアで涙流しまくりに、免許の取得も睡眠不足で大幅に遅れました。免許合格の瞬間、これで歌月十夜ができる〜！」でしたから（笑）

今回はシエル先輩のお話。自分の得意分野「ラブラブ路線」でいってみましたが、ちょっと文章がかつたるくなりがちで、自分でも頑張って端折ったはずなんですけど、いかがでしたか？

ネタとしては、いい感じでした。

実は中出し大好き志貴君、実は先輩にだけは中出ししてないんですよー
罪悪感たつぷりに翡翠やレンに出しているくせに、一番問題なさそうな人には出さないんですから、変な志貴君です（笑）

そこを発見して、無理矢理こぎつけてみました。こんな所まで先輩を不憚にしちやいけないですから。

唯一中出しされず、唯一後ろ出しされる、そんな哀れな先輩を僕は応援します（笑）

朱鷺恵さんが俺のペニスを握りしめた。

「あ……」

どちらからともなく声が漏れた。朱鷺恵さんは少し驚いたような声。俺は：尻尾を捕まれてしまったかのような細かい声、と言うより、体を走り抜ける未知の感覚に、自然に声が出てしまっていた。

朱鷺恵さんに触れられた瞬間の記憶がなかった。まるで、フラッシュを目前で数十個たかれたような視覚だった。今までに何度も、自分でこうやって慰めた事があった。その時だって満足できる感覚ではあったはずだ。それなのに……誰か、それも「想像の中で慰めて貰っていた」人が触るだけで、こんなに違うのか……が、俺の思考はそこで止められた。

ビクン、と大きく反応し、更に膨れあがるペニスの感覚を手で感じ、肩に感じる朱鷺恵さんの吐息の種類が変わった気がした。少し潤むような声で「志貴君の、凄い……」

朱鷺恵さんはそう呟くと、後ろから手探りで俺のペニスをゆっくりと手でなぞり出した。バスタオル越しに背中に押しつけられる胸の感触があるが、そんなものが些細な事にしか思えないほど、手の動きは強烈に俺の感覚をそこに集中させ、同時に麻痺させていた。

きゅ、しゅ……

朱鷺恵さんは陰茎の部分に手を巻き付け、大きさを測るように手を上下させていた。慈しむような、優しい感覚。とにかく、キモチイイのかも分からないほど陶酔麻痺の感覚で、体は硬直し抗う事が出来なくなっていた。

「こうなってるんだ……」

その手がゆっくり下に、俺の陰囊を指先が撫でる。

一瞬、ぞくりとした感覚に思わず声が出そうになる。しかし、声を出そうと息を吐いた瞬間に、出してしまいそうだった。鳥肌が立つ感覚に歯を食いしばり、耐える。しかしそれは陰囊を引き締めさせ、ペニスをビクンと反らす形となって俺に反抗し、逆に朱鷺恵さんに快感の表れを示してしまっていた。

「志貴君、感じてるんだ……」

朱鷺恵さんの声が耳元で聞こえる。なのに、意識がやられそうな俺には遠くにしか聞こえない。言葉も返せない俺を見て、肯定と取ったのか、ぼうとした視界に映る鏡越しに朱鷺恵さんが可愛く笑って、愛撫を再開する。

「男の人って、こうするんでしょ……」

しゅっ、しゅっ

朱鷺恵さんの細い腕が、俺のペニスをしごきだした。先程までの緩やかな感覚とは違う、的確な上下運動

「……っ……」

一気に、深みに沈められそうになる。頂上へ上り詰められそうになる。自分では幾回もそうしないとともこんな感覚にならないのに、朱鷺恵さんに僅か擦られただけで果ててしまう。

それでも耐えた。奥歯が砕けそうになるほど嘔み、残る理性を総動員する。尚も朱鷺恵さんは俺自身に刺激を与え続ける。

これは拷問だった。本当は今すぐにでもぶちまけてしまいたいの、出してはいけないという僅かな正気が、それを許さない。

憧れていた女性の愛撫……それは本来ならば夢にまで見た行為なのに、その愛

撫で今ここで果ててしまふのは、俺の中の十二力を崩壊させてしまふ。

「志貴君、我慢してるの?」

朱鷺恵さんの手の動きが緩慢になる。漸く悪戯にも飽きて終わるのかと、安堵の息をつけると思った瞬間だった。

「でも、ここはどうなのかな?」

そう言つて、離れると思つていた手の平は、ペニスの先端を優しく撫でた。

「……」

その不意打ちは、気を抜いていた俺にはあまりに強烈すぎた。残されていた僅かな理性は、あっけなく崩壊した。

どくっ、どくん!

今までずっとため込んでしまつていたものが、堰を切つて鉄砲水のように弾け出す。

陰囊の奥底からピクンピクンと、白濁が朱鷺恵さんの手を汚す。

「あぁっ……」

意識が飛びそうな中、口を出した声。それは、遂に放出してしまつた充足と、出してしまつた後悔と、特別な存在だった朱鷺恵さんへの懺悔とが入り交じる声だった。

波のように、俺のペニスはその放出を繰り返しては跳ね、そしてゆっくりとその動きを引いていった。今までに出した事もないような、とてつもない量の精液を放出し尽くして、漸く射精は終わった。

朱鷺恵さんはその間、驚いたように俺の放出を受け止めていた。やがてそれが終わると、ゆっくりと手を持ち上げ、自分の手に絡み付く精液に、しばらく見呆けていた。が、やがてそれが何で、どうしてそつなつたのかを理解したみたいだった。

「あ……」

少しだけ声がうわずりながら、でも明るく振る舞つて朱鷺恵さんはシャワーに手をかけた。蛇口を捻つて湯を出し、自分の手と、俺の股間に浴びせる。

その間、互いは互いを見ていなかった。共に無言の罪悪感から、その作業は淡々と進んだ。

俺の中で色々な意識がグルグル回る。それは何なのか、全く収拾のつかないモノ。ただ一つだけ分かる事は、その方向が全て「負」を向いている事だけだった。

やがて、キュッと蛇口を閉める音、後ろに屈み込んでいた朱鷺恵さんが立ち上がる。

「そ、それじゃ、のぼせたりしないでね」

そう言い残して、足早に浴室を後にしていった。

残された俺はどうする事も出来ず、動けずにいた。

ドウスル……ドウシヨウ……ドウシヨウ……

そんな答えも出ない考えにもならぬ音句が、自分の中で連呼されるだけだった。

「……」

朱鷲恵さんが俺を見下ろしながらゆっくり腰を下ろす。

ニユツ……

朱鷲恵さんの入り口に俺の先端が触れた瞬間、未知の感覚が俺を襲った。吸い付くような、そして愛液が俺自身を溶かすような感覚。

「いくよ、志貴君……」

そう言つて、ペニスが朱鷲恵さんの膣に沈んでいく。朱鷲恵さんは目を閉じて、その感覚を感じ取るうとしていたようだった。

その瞬間、弾けそうになった。でも男としてそれだけは避けたかった。目の中に火花が走る。それを殺すように奥歯を噛み、射精感をこらえた。

ゆっくりと、そして遂に、俺の全てが朱鷲恵さんの中に埋没した。最奥に僅かに当たる感覚。

「ほら……全部……入ったよ……」

言つが早いか、朱鷲恵さんはゆっくりと腰上下させる。その度にペニスが朱鷲恵さんを出入りする様がよく見えてしまつた。

訪れる感覚は異常だった。朱鷲恵さんの膣はぎゅっぎゅつと俺を締め付けてくる。きつくて、まるで異物を押し出すような運動をしているようだ。しかし、それが痛いとかそういうものじゃない。

キモチイイのだ

普段の感覚ならそれは、陰茎を搾り取られるようなモノ。なのに、どうしてキモチイイのだ？

ワカラナイ。

そんな事を考える余裕もなく、快感が早急に俺を支配する。

「これが、志貴君……なんだ……んっ……」

朱鷲恵さんの声が、少し艶っぽいものに聞こえる。朱鷲恵さんはどうなのかなんて構つてられず、上下する動きに翻弄され、昨日みたいに我慢する事なんて……全く出来なかった。

「だ、ダメです……朱鷲恵さん……！」

そこの方からせり上がる感覚を、俺は一瞬も耐えられなかった。

「えっ、し、志貴君？」

目を見開いて、朱鷲恵さんが驚いたような顔をする。でも、限界だった。

あつけなかった

ビクツ、ビクンツッ！

ため込むほどの時間も我慢もなかったのに、俺の意識は飛び、爆発してしまつた。

「あっ……」

放出の瞬間、朱鷲恵さんがその声と共に目を閉じていた。

俺は沸き上がる精液の奔流に何の杭も打てず、ただ放出するだけだった。狭い膣の中に流れ出す感覚。自分でも情けないほどの正直さで、したたかに射精するだけだった。

「あ……出てるよ……志貴君のが……」

確認するように、朱鷲恵さんが咳く。弾かれるように少し腰を浮かして、受け止めている。

その声を聞いてもなお、終わらない。二人の繋がった部分はほとんど隙間が

ないはずなのに、その残りの部分も全て埋めてしまつよつに、俺の精液が流れ込む。そして、膣を全て満たしてしまつと思つた頃、いつ終わるとも知れない放出は、漸く収まった。

「あ……」

俺は、そんな声しか出なかった。遂に……成し遂げてしまつた感覚。朱鷺恵さんと……繋がつたその行為の実感。気持ちに整理が全く付かないが、とにかくそれは、ずっと夢見続け、夢でしかないと思つていた事だつた。

しばらくして、朱鷺恵さんがゆっくりと薄目を開ける。眼科の俺にゆっくりと微笑みかけると

「朱鷺恵……出しちゃつたんだ」

そう語りかけてきた。

「……はい」

俺には答えるしかなかった。自分勝手に果ててしまつた事もあり、申し訳ない気持ちだつた。

「でも仕方ないよ、初めてだし……誰だつて最初からそう上手くいかないわ」

朱鷺恵さんは優しく慰めてくれる。それは自分の情けない気持ちを和らげてくれた。

「わかるよ、朱鷺君のが私の膣でいっぱいになつてるもの……」
いとおしい表情で朱鷺恵さんにそう言われて、まだはっきりしない意識で視線を下に移し、繋がっている部分を見た瞬間……

俺の意識が一気に覚めた。

僅かながらの血の色。

「……と、朱鷺恵さんっ……」

俺はとにかく、驚きの声を上げるしかなかった。

「あは、気付いちやつた？」

少し苦笑いして、でも、朱鷺恵さんは微笑む。

「朱鷺恵さん……初めて……？」

「どうして……」

「だつて朱鷺君に気を遣わせたくなかつたんだもの。気持ちよくなつて貰いたいの、相手の事なんて気遣わせる事は出来ないでしょ。聞かれなかつたし、言わなかつただけよ」

「でも、初めて……その……」

「あ、破瓜の痛みは個人差があるの。私の場合はほとんど無かつたわ。本当は物凄く痛かつたらどうしようつてちょっと不安だつたけど、自分の体に感謝ね」
朱鷺恵さんはあっさりと言つてのける。

「そんな……」

ショックだつた。こんな自分に処女を捧けても良かったのだろうか。それとも朱鷺恵さんにとっては、バージンとは「そんなモノ」だつたのだろうか？
ワカラナカツタ。

「違うわ、朱鷺君」

「……なにが？」

「私だつて、ちゃんと普通に恋愛したいの。でも、父さんがうるさいから、ちゃんとした付き合ひなんて出来なかつただけよ。でも、朱鷺君は特別な。父さんにとつても、私にとつても。最初は違つたかも知れないけど、一緒にいる内に朱鷺君の存在は私の中ではそうなつてたの。だから、初めてだつて……一番好きな人に捧げたのよ」

「……」

言葉がなかつた。でも、こんな形での告白つて、何だか悔しかつた。

「……するいよ、朱鷺恵さん。自分ばかり」

「えっ？」

「ようやく見つけた言葉に、朱鷺恵さんは少し驚いた表情を見せた。

「……俺だって初めてだった。でも朱鷺恵さんの事を気持ちよくさせたいと思う。なのに自分ばかり俺に気遣って、俺には気遣わせてくれないんですか？」

俺は、素直に想いをぶつけた。これで終わり、だったら絶対に許せなかった。だから、今度は俺にも気を遣わせてください。さっきは……ダメだったけど、

今度は頑張って、朱鷺恵さんにも気持ちよくなって貰いたいです」

捧げてくれた嬉しさと、このままだと後悔しそうな自分に、自然に口を衝いて出た言葉だった。

朱鷺恵さんは驚いた表情のまま、それを聞いていた。が、ゆっくりとその顔をいつもの微笑みに変えると

「うん……、お願い……志貴君……」

そう言っ、俺に体を預けてきた。その瞳に、微かに涙が浮かんでいた。

本来は公開できるはずだったのですが、時間と紙面の都合上予告編のみの公開となりました。ユメナナサイ。

朱鷺恵さんは設定だけがあってその内情はほとんどというか全く語られなかったから、物書きとしての興味が引かれましたね。

「志貴の初めての相手」と言う設定が、そりゃあ意欲を沸かせる結果ともなったわけですが、もしかしたら「受け」の志貴を書いてみたのかも知れませんがね（笑）

完成作品は、一月中には後述のモノの方で公開できたら……と思っています。何せ遅筆な上、月姫で書きたいSSがいくつもあるモノで……。

あまり期待しないで待っていてください。

実は別名義であるモノを制作中だったりしています。まあ、誰も興味ないと思いますが……

それでは、最後までお読みいただき、ありがとうございました。次は夏コミでしょうが、

3月くらいにどこかイベントに出られたら、と思っています。

師走も押し迫った某日というか前日 古守 久万

ブックマーク 場所 <http://home10.highway.ne.jp/furumori/nok.ouma/nok.ouma.htm?>

猫vs馬



月姫、記憶しています

ここは、古守久万画事サークル「猫vs馬」のページです。
平ここ、管理いたしました。

(日)東カ-03bです

「猫vs馬」
月姫
その他のStories(準備中)
猫掲示板(ご感想をどうぞ)

Back

古守久万 HP 「Ancient Guardian」 (<http://home10.highway.ne.jp/furumori/>)

現在は月姫のSSを中心に掲載しています。
まだ作品は完成品が1つだけという状況ですが、徐々に増やしたいと思っておりますので宜しかったら覗きに来てください。

後、「Moon Gazer」というHP (<http://moongazer.f-o-r.net>)
にも同様のSSを投稿させていただいてます。こちらには他にも沢山の月姫SSがありますので、是非訪れてみてください。

この本を許可無く複製・配布する
ことを禁じます。



月姫

奥付

住所：〒182-0025

東京都調布市多摩川3-18-10 ハイッ共和203

佐野 昌弘

メールアドレス：furumori@pk.highway.ne.jp

HP 「Ancient Guardian」：http://home10.highway.ne.jp/furumori/

猫 VS 馬

2001-2002